

4) 行政部門担当者名

水産課 漁政係長 嘉数 清

振興係長 奥間 徳五郎

5. 協力機関名

恩納村漁業協同組合、恩納村役所経済課、沖縄県漁業協同組合連合会

6. 調査研究活動の目的及び方法

1) 目的 モズク養殖業の振興

2) 方法

- ① 現養殖漁場の行使状況、生産状況、及び流通情報をアンケート聞き取りにより把握する。
- ② 漁業者を含めた活動組織による総合的な検討会を設け諸分野にわたる問題点を抽出する。
- ③ 養殖現場における経験的な養殖技術及び経営面に関する情報を収集する。
- ④ 漁場行使、調整状況、オキナワモズクに関する調査研究成果からモズク養殖漁場の合理的な利用と効率的な養殖生産の導入を図る。
- ⑤ 沖出し養殖の可能性について検討する。

7. 調査研究活動の結果

(1) 調査地域の位置と社会経済的条件

調査対象地域である恩納村は沖縄本島中央の西海岸に面し、面積約5,082km<sup>2</sup>で東北部は名護市に南東部は宜野座村、金武村、石川市、南西部は沖縄市、読谷村に接している。村の東南部を縦走する山脈の分水嶺をもって市村の境界としている。喜瀬武原の部落が安富祖と金武村の山間地にあるほかは、国道58号線及び県道6号線沿いに14の集落が有り隣接市村との経済的、社会的交流が深い。

地形は、標高362.8mの恩納岳を主にし、北に大綾岳(234.2m)、南に石川岳(214.2m)、読谷岳の連山が起伏し、ゆるやかに低くなり、幾多の小河川が西海岸に注いでいる。

地層は、国頭礫層に属する部分が多く、一部海岸寄りの低地は砂質土壌になっている。調査地域の位置図を図-1に示す。

昭和50年の国勢調査によれば本地域の世帯数と人口は1,811世帯、8,266人である。本調査地域の産業構造は表-1に示すとおりである。

昭和45年と昭和50年の産業構造の推移をみると第一次産業就業者は大幅に減少し、二次産業就業者は横這いで、第三次産業就業者が増加している。第三次産業就業者の構成比率が高いのは、県全体の産業構造のもつ特徴となっており、特にサービス業の比重が高く、又、復帰後の観光産業が海洋博を契機として著るしく伸びた結果である。恩納村の場合も海岸全域が沖縄